

近江における鋳物師

白井 忠雄

1. はじめに

近年の発掘調査によって、全国的に鋳物師関連遺跡の調査が増加する傾向にある。そこで、ここでは近江における中世から近世の鋳物師集団について述べてみることにする。

2. 近江古代・中世の梵鐘作品

近江古代・中世鋳物師の梵鐘作品は第1表の通りである。この第1表近江の中世鋳物師梵鐘作品表は、梵鐘研究家の第一人者である坪井良平氏著『日本の梵鐘』昭和45年版と、原田一敏氏著『日本金工師名譜』『東京国立博物館紀要第22号』昭和62年刊より橋本鉄男氏が近江の鋳物師に関係した資料を抽拙され、それを表にしたものである。

原田一敏氏は、近年発見された三重県袋井市教育委員会蔵の参河国渥美郡東絵里岡寺の平治二年（1160年）梵鐘銘に「大鋳師藤原満長、小鋳師息長法修、同定房」と、滋賀県志賀町正源寺の正応三年（1290年）梵鐘銘に「大工矢田部宗次」があることから、坂田郡に息長姓と矢田部姓の鋳物師が居住していたと推定している^②。

また、息長系鋳物師は14世紀以降は八田部氏や橘氏を含めて発展していたようである。

愛知郡にあっては、湖東町長村鋳物師が愛知郡東漸寺鐘に「大工長村道欽」の名前をとどめている。

つぎに、八日市鋳物師であるが、八日市の金屋には中世以来鋳物師が活動していて、よく知られている。

ここで全国に目をむけると、平安時代の末から鎌倉時代にかけて、河内鋳物師が活躍する時代がある。彼らは時の朝廷の灯炉供御人となり、朝廷用の灯炉を進上し、併せて全国自由に鋳物の営業をする特権を獲得して、権力を拡大し組織を広げる。

しかし、その後には河内鋳物師だけでなく、全国的に地元の鋳物師が生まれて活躍しだし、室町時代から戦国時代にかけては、全国統一的な灯炉供御人の組織はほとんど解体状況へと向かう。16世紀の天文年間に蔵人所小舎人となった真継家は、解体状況にある鋳物師集団の再組織化に乗り出し成功をおさめて、江戸時代を通じて鋳物師集団の頂点に立つのである。

つぎに考古学の遺跡・遺構・遺物を通して、古代末から中世の近江における鋳物師の足跡をながめてみることにする。

考古学からみた古代末から中世にわたっての主要な鋳造関係遺跡は、大津市長尾遺跡・大津市坂本八条遺跡・愛知郡秦荘町軽野正境遺跡・栗太郡栗東町辻遺跡等が挙げられるが、他にも遺物だけが発見されている遺跡もある。

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
長命寺鰐口	甲賀郡惣社油日大明神鐘	神崎郡三河部大明神鐘	蒲生郡十禪寺鐘	今堀日吉神社洪鐘	坂田郡春照村泉神社鐘	伊香郡黒田観音鐘	愛知郡東漸寺鐘	大津市葛川明王院鐘	伊香郡横山大明神鐘	浅井郡上許曾神社鐘	滋賀郡志賀町正源寺鐘	袋井市教育委員会蔵鐘	名 称
大工八日市太兵衛	大工蒲生郡八日市鉄屋 藤原氏次郎右衛門尉	大工八日市新兵衛	〃	大工八日市五郎兵衛	大工落合河八田部共義	大工兵衛尉八田部守友	大工長村道欽	冶工左衛門尉橋末安	橋末繼	大工弥田部家	大工矢田部宗次	鑄師息永法修同定房	在 銘
16世紀	16世紀	16世紀	15世紀	15世紀	15世紀	15世紀	14世紀	14世紀	14世紀	14世紀	13世紀	12世紀	年 代
〃 現在していない。	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 橋氏は息長系	〃	滋賀県	三重県	備 考

第1表 近江の中世鑄物師梵鐘作品

(橋本鉄男「近江の鑄物師伝承」『近江の鑄物師』2 1988年刊より作成註-1)

長尾遺跡は大津市滋賀里町字長尾に所在する。この遺跡の発掘調査は昭和52年に実施された。調査によって平安時代前期の梵鐘鑄造施設及び瓦窯^③を検出した。(図-①)

梵鐘鑄造遺構は2基検出され、第2号遺構と呼ばれている鑄造遺構の平面は隅丸方形で東西約3.1m、南北2.9m、深さ中央で0.8mの規模を有する。埋土からは木炭・灰・焼壁片・銅渣^{どうさ}の固着した焼壁片・銅滓焼土・瓦・須恵器・礫が出土した。坑底には東西2条の溝があり、両端に円形ピットが設けられ、北側両隅に柱穴跡があり南壁両隅には斜めにピットが設けられている。坑底にある東西2条の溝は梵鐘鑄造の際、鑄型を固定するための掛木跡である。

第4号遺構は平面が方形で南北3.2m、東西3.6m、深さ南辺1.5m、西0.9mの規模がある。坑底には第2号遺構と同じく3条の浅い溝があり、両端にピットが設けられている。坑内の四隅には柱穴が検出された。埋土からは木炭・灰・梵鐘鑄造と考えられる鑄型片・銅渣の固着した焼壁片・羽口片・銅滓・土器片・礫などが出土した。

第1号と第3号遺構とよばれているのは溶解炉施設である。

第1号遺構は平面が楕円形で長径2.9m、短径1.1m、深さ0.7mの規模を有する。坑底はU字状で埋土から木炭片・銅滓がみとめられた。

第3号遺構は平面が楕円形で長径が約4mである。埋土は第1号遺構と同じく木炭・灰・土器類・銅滓・焼壁片が多量に出土した。梵鐘鑄造関係の出土遺物としては梵鐘の乳が第3・4号遺構から出土した。

長尾遺跡の性格については、報告者である林博通氏が、検出された梵鐘鑄造掘込み施設(第2・4号遺構)と銅溶解炉施設(第1・3号遺構)は第1号と第2号遺構・第3号と第4号遺構がセット関係にあると考え、掘込み施設については、「四隅のピットは高架物の柱穴、数条の浅い溝は丸太材を固定した跡とみられ、鑄型の定盤の下にかました丸太と相対する形に鑄型の上端に置いた棒を緊縛することによってそのズレをなくしたものと考えられる。そして、溝両端のピットはその作業のための空間を作り出すためのものかもしれない—中略—2組の鑄造遺構のうち1組は崇福寺用、1組は梵釈寺用と解することも可能であり、南滋賀廃寺との強い関連もうかがわれるため、ここで鑄た梵鐘は南滋賀廃寺に供給した可能性も考慮する必要がある。」と説得力のある説明をしている。

私は梵鐘鑄造の基本は寺域内外で行うのが本来のすがたであろうと考える。近年の調査例からみると、奈良県東大寺・兵庫県多可寺・福井県豊原寺などからは寺域内外から鑄造遺構が確認されている。坂本八条遺跡は大津市坂本に所在する。

坂本八条遺跡からも長尾遺跡と同じく梵鐘鑄造遺構が検出されている。遺構は隅丸方形を呈した土坑で南北1.7m、東西1.96m、深さは現高0.4mの規模を有する。坑底からはやはり掛木跡として東西に2本の溝があり両端にピットが設けられ四隅に柱穴が検出されている。埋土よりめずらしく梵鐘の竜頭部分の鑄型片と銅滓・焼土・炭等^④が出土した。(図-④)

坂本八条遺跡の調査者である吉水真彦氏は、鑄型を据え溶解した湯を注ぎ込んで梵鐘を鑄造する施設であることを確認し、平安時代後期の年代をあたえている。

軽野正境遺跡は愛知郡秦荘町大字軽野字正境に所在する。昭和52・53年の発掘調査によって鑄

造工房群が検出され、鋳型や鑪の羽口他が出土した。操業年代については足裏型坑内の版築状土層内から室町時代末期の信楽焼の陶器の破片が含まれていたことから同時代であろうと考えられている^⑤。

この遺跡の性格については報告者である近藤滋氏は「中世の一梵鐘等の鋳造工場跡と考えられ、第1次調査での諸土坑群は長尾遺跡では未確認である鋳造準備をする工房群であり、やや離れた所に溶解坑があり、ここから樋により溶けた銅等が流され、一段低くセットされた鋳造坑の鋳型に致って梵鐘等の大型の製品から作られたと考えられるのである。」と述べられている。

軽野正境遺跡の性格は近くに湖東町の長村がひかえており、長村鋳物師の出吹跡と考えるのが妥当であろう。(図-②)

辻遺跡は栗太郡栗東町大字高野字辻に所在する遺跡である。昭和58年に高野字やどや地区が発掘調査され、そこから炉跡と考えられる遺構が4基検出された。出土遺物は鉄滓と鋳型片が確認され、他に黒色土器・土師器・羽釜類がある。出土した遺物より12世紀後葉から13世紀代の年代が想定されている。

この調査結果から調査者である平井寿一氏は、辻村が平安時代末期より「鉄」の操業が営まれていたのではないかと指摘がされている。

中村遺跡は栗太郡栗東町大字御園に所在する遺跡である。平成元年に調査された地区から2基の溶解炉跡が検出され、1号炉の北側には通風跡と考えられる長方形土壇がある。この土壇には上部にタタラ板を有するタタラ踏み場が施設されていたと想像する。年代としては出土遺物より9世紀前半と考えられる^⑥。(図-③)

矢倉口遺跡は草津市東矢倉に所在する古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。平成元年度の調査でS E O 1と呼んでいる井戸跡から鋳型(ナベ)・ルツボ・炉壁片等が出土した。時期としては出土した土器から8世紀中頃から9世紀中頃と考えられる^⑦。(図-⑤)

他の鋳造関係遺跡は、古代にあっては大津市瀬田南大萱芋町の鋳物遺跡から和銅銭とルツボが出土したと伝えられている。また、昭和46年に実施された湖西線関係遺跡の大津市南滋賀工区からピット内に焼土とその周辺からファイゴの羽口や鉄滓・銅滓と銅製止め金具の出土をみた。大津市瀬田にある近江国衙からは鍛冶炉20基以上とファイゴの羽口や埴形滓が出土した。大津市錦織遺跡・愛知川町畑田廃寺遺跡などからは鋳造関係の遺物が出土して、野洲町福林寺遺跡・蒲生郡宮井廃寺などからは鍛冶関係の遺物が出土している。

湖北地域にあっても、高月町井口遺跡をはじめ断片的な鋳造関係遺物を見ることができる。これらは、古代末に国衙や郡衙以外の集落にでも鉄や銅の鋳造技術が受け入れられた証であり、今後これらの遺跡の調査が進めばより一層の鋳造技術のあり方が判明するものと思われる。

また、中世の終わりごろから戦国領主層や有力寺社層が金属工房をだきこむ形で発展をつづけるようである。

近江国守護職佐々木氏の被官後藤氏の居館である八日市市後藤館遺跡からは、ルツボが出土し鋳造工房が考えられる^⑧。日野町小御門遺跡や野洲町上永原遺跡(在地永原氏の居館)^⑨などからも鋳造関係遺物が出土している。

有力寺社層としては安土町浄厳院に係した慈恩寺遺跡^⑩などで鑄造関係遺物が出土している。

これらは、近江国の中世鑄物師の活動に対する少ない遺物であって、本来はもっと多くの事例があると考ええる。それを解明するには、中世の遺跡を調査する際に特に遺物等（鑄造関係）に気くばりながら調査を推し進めるなかにあってはじめて解明されるであろう。

3. 近世鑄物師と宮野鑄物師

近江における近世鑄物師を真継家が作成した『諸国鑄物師名寄記』^⑪（文政11年～嘉永5年）から見るとつぎのようである。（図一⑥）

栗太郡辻村鑄物師・滋賀郡和邇南浜村鑄物師・甲賀郡寺庄村鑄物師・蒲生郡八幡多賀村鑄物師・蒲生郡八日市金屋村鑄物師・坂田郡長浜金屋町鑄物師・神崎郡三俣村鑄物師・高島郡宮野村鑄物師の名前が見える。これらに加えて、滋賀郡納村鑄物師・蒲生郡日野町鑄物師・坂田郡小田村鑄物師・坂田郡大久保村鑄物師・坂田郡大野木村鑄物師・浅井郡平塚村鑄物師がいる。

これらの鑄物師集団は、中世以来発展して近世に活躍した諸集団であろうと考えられる。鑄物師集団のあり方を見ていると、湖東から湖北にかけて多く分布している。やはりこれらは鑄物の需要と供給を如実に表しているものであろう。

栗太郡では、辻村を中心に梅木村と高野庄久保村に鑄物師がいた。辻村鑄物師は、中世からの歴史があり、近世になっていちやく全国に出職・出店をもち、大きく発展した。^⑫

甲賀郡では、望月姓の鑄物師がいたことが『諸国鑄物師名寄記』からわかる。

蒲生郡では、八幡多賀村に望月や国松姓の鑄物師がおり、八日市金屋村には田中・松吉・北岡・北沢・堤・金屋・釜吉などの姓の鑄物師がいる。

この八幡多賀村鑄物師と八日市市金屋村鑄物師との間には、ひとつの論争がある。それを『八日市市史』第3巻一近世一（昭和61年刊）から見てみよう。

享保四年（1719）、蒲生郡豊浦村（蒲生郡安土町）にある天台宗東南寺の鐘鑄造をめぐって栗太郡辻村から八幡多賀村（近江八幡市）に出店を出していた国松伊兵衛と、金屋村鑄物師と間で、各村の庄屋・領主から真継家、京都町奉行所にまで至る、以後九年間に及ぶ大論争が展開される。

本文を続けると長くなるので要約するが、この大論争については『冶工由緒記』（石川県立郷土資料館所蔵武村家文書）に辻村側に残された記録がある。^⑬

東南寺の鐘鑄造をめぐって、寺が費用見積書を受け取ったところ、八幡多賀村の伊兵衛に決定した。これに対し、八日市市金屋村鑄物師が勅許鑄物師として蒲生郡の総領職を司っているのだから、銘文をこちらで入れることを主張しはじめる。

そして争いは、「八幡伊兵衛・辻村」と「金屋・真継家」という図式へと発展していったのである。この争いによって、真継家の鑄物師支配およびそれに基づく各郡の総領職を認めるかにしほられた。

そして、結果的に辻村側は享保11年（1762）から翌12年にかけて、一切の課役のないことを条件に真継家と和解し、その支配下に入った。

東南寺の鐘銘は

御免御鋳師

八幡住

国松伊兵衛藤原重定

蒲生郡豊浦

仏立山正覚院

東南寺現住

大阿闍梨法印秀憲代

享保四歳亥八月

(『近江蒲生郡史』五卷^⑭)

とある。

東南寺釣鐘銘文事件で辻の鋳物師仲間が真継家と和談することになるのである。

日野町鋳物師には富田姓のものがいる。日野町の近くには蒲生町の竹田神社(旧菅田神社)がある。竹田神社は多くの鋳物師から信仰を集めているが、これは竹田神社の所在地が蒲生町の鋳物師にある村社であるがゆえ信仰を集める結果となったのであろう。

神崎郡では八日市金屋村鋳物師が所在している。この金屋村鋳物師は蒲生・神崎両郡に多くの鋳造品を残している。五個荘町三俣には徳田氏一系統の鋳物師がおり、西澤氏が安政年間(1854～59)に徳田氏を継ぎ現在も古い形式で梵鐘等の鳴り物の鋳造を行っている。

愛知郡湖東町長村に黄地・中村・藤村姓の鋳物師がいた。長村鋳物師の歴史も古く中世からであろう。長村では黄地氏が現在も金鋳堂という鋳造所を営んでいる。

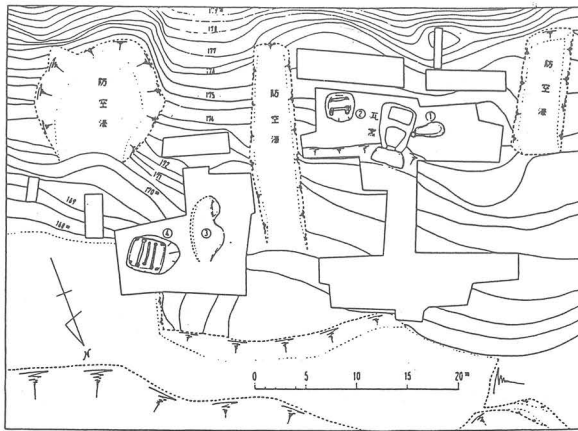
坂田郡では、長浜金屋の西川姓の鋳物師がいる。山東町では息長系鋳物師の系譜持つ矢田部姓の鋳物師が在居していたと推測される。

湖西地方には、滋賀郡和邇南浜村に我孫子姓の鋳物師が住んでおり、高島郡では宮野村に白井・関・釜屋姓の鋳物師が活動していた。

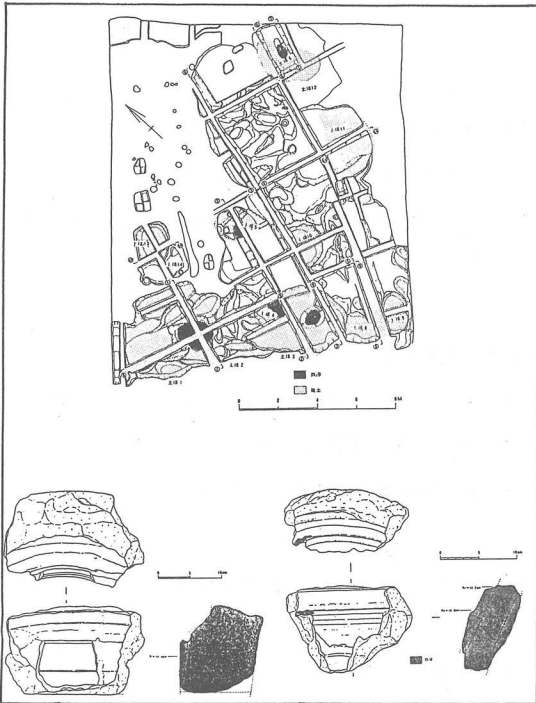
ごく大づかみに近江の近世鋳物師をながめてきたが、彼らの鋳造作品はほとんどが第2次世界大戦の当時に供出されており、いまひとつその実態が把握しづらい面がある。

そもそも鋳物師は、古代において銅鐸・銅剣・銅鉾・銅戈・銅矛等を鋳造しており、その形態は遍歴の鋳物師集団であった。律令期になると鋳物師は大蔵省典鑄司に属すが不明なことが多い。古代末から中世になると丹治姓の鋳物師は「土鋳物師」と呼ばれる組織を作り、また、広階姓の鋳物師は「廻船鋳物師」の組織を作り諸国にその力を広げていった。これらは「座」と呼ばれる中世の職人集団に合うものである。しかし、これらの集団に属さない遍歴の鋳物師も活動をつけている。

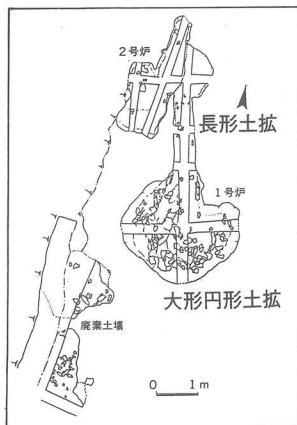
これらは当時の社会不安が如実に職人集団にもあらわれていると思う。ちなみに近江の鋳物師がどのような行動をとっていたかについては定かでない。しかし、全国的にみると鎌倉時代後期



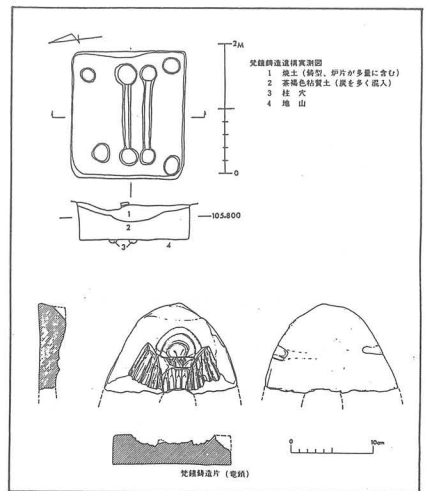
①大津市長尾遺跡遺構配置図 ①③—銅溶解炉施設
(註-3より) ②④—梵鐘鑄造掘込み施設



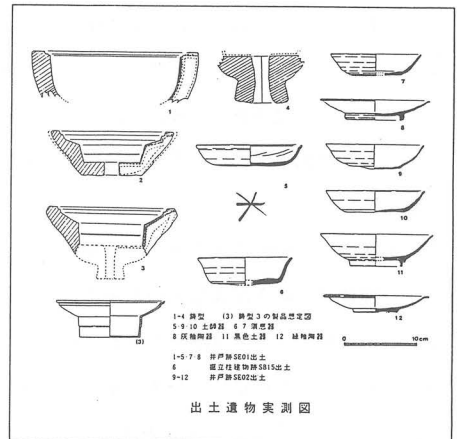
②秦荘町軽野正境遺跡遺構配置図と鋳型(註-5より)



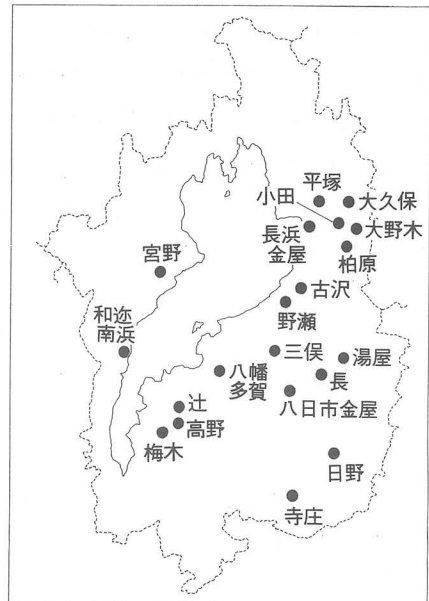
③栗東町中村遺跡鑄造遺構図
(註-6より)



④大津市坂本八条遺跡梵鐘鑄造遺構と鋳型
(註-4より)



⑤草津市矢倉口遺跡出土鋳型等(註-7より)



⑥近江における近世鋳物師分布図

になると鋳物師職人の定着がみられるようになり、近江国でも中世遺跡から出土する鋳造関係を遺物はこれらの傾向を示すものかもしれない。鋳物師集団は荘園・有力領主ならびに寺社層の支配下に組みこまれていったのであろう。

しかし、16世紀に入ると蔵人所小舎人で御蔵の職であった真継家が全国の鋳物師の編成に成功し大きな権力を有することになった。

近江の辻村鋳物師は遅くまでその組織に入ろうとしないが、東南寺釣鐘銘文事件（1763）以降は真継家の支配に含まれていくようである。

今後の研究課題としては中世遺跡から出土する鋳造関連遺物がいかなる鋳物師集団の手によって鋳造された商品かを解明することによって遍歴する鋳物師の実像がみえてくるものとする。

< 註 >

- ① 滋賀県教育委員会『近江の鋳物師』1・2（滋賀県教育委員会 1987・88年）
 - ② 原田一敏「日本金工師名譜」（『東京国立博物館紀要』第22号Ⅱ 1987年）
 - ③ 林博通「長尾遺跡の梵鐘鋳造跡」（『古代研究』27（財元興寺文化財研究所 1984年）
 - ④ 吉水真彦他「坂本八条遺跡発掘調査報告」『滋賀里；穴太地区遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（大津市教育委員会 1985年）
 - ⑤ 近藤滋他『軽野正境遺跡発掘調査報告書』（秦荘町教育委員会 1979年）
 - ⑥ 『埋蔵文化財発掘調査1989年度年報』（財栗東町文化体育振興事業団 1990年）
 - ⑦ 谷口智樹「矢倉口遺跡調査概要（第23次）」『季報みちしるべ43号』（草津市史編さん委員会 1990年）
 - ⑧ 石原道洋『内掘遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』（八日市市教育委員会 1983年）
 - ⑨ 中川通士「上永原遺跡発掘調査」『昭和58年度野洲町遺跡群発掘調査概報』（野洲町教育委員会 1984年）
 - ⑩ 石橋正嗣「慈恩寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』X—5—1（滋賀県教育委員会 1982年）
 - ⑪ 村内政雄「由緒鋳物師人名録」（『東京国立博物館紀要』第7号 1972年）
 - ⑫ 「諸国出職職明細鑑」『滋賀県の民具』9（滋賀県教育委員会 1989年）
- 近江国栗田郡高野辻村にあって、三州・越後・美濃・若州・羽州・信州・丹後・伊勢・駿州・遠州・江戸・勢州・加州・大坂への出店や出職の状況が書き添えられている。
- ⑬ 「治工由緒記」—武村家文書—『滋賀県の民具』9（滋賀県教育委員会 1989年）
 - ⑭ 滋賀県蒲生郡役所編『近江蒲生郡志』巻5（八幡町・滋賀県蒲生郡役所 1922年）